

# 風土



西鶴忌

神蔵器

西鶴忌うしろより肩叩かるる

名月や月をとらむと目をつぶる

三伏の末伏神田川流れ

モナ・リザの微笑月見草の微笑

涅槃図に今年の蟬のこゑ聞かず

りんだうの四五本仏よりもらふ  
旧の盆大声でないしよ話かな  
掃苔に行く約束も果し得ず  
露けくてわが生涯の果ての道  
満天やいま誕生の星もあらむ  
机に置くどこが正面くわりんの実  
死ぬことによき日とてなし星月夜



# 竹間集

同人作品



雨しづく

橋添やよひ

ひと出多き四条となりぬかき氷  
山鉾や降臨松の雨しづく  
蔵開ける匂ひしてをり鉾会所  
まち合はす祇園囃子の風にかな  
羅や祇園雨音さん、小雀さんを迎ふの裏の観音堂  
厄除けや祇園囃子の天へ抜け  
宵囃子とどく蕪村の終焉地

音違へずに

南うみを

鉾町や手押し車の宅急便  
千年を音違へずに鉾組めり  
鉾衆の一人ひたすら屑を寄せ  
まだ履かぬ草鞋の匂ふ鉾会所  
鉾に雨浴衣の裾をちよと上げて  
鉾出でし蔵涼やかに黴匂ふ  
鉾粽売るいんぎんに老獺に

白 雨

宮川みね子

振花の螺旋をまはる蝶に逢ふ  
夕焼の濃き方へ坂登りけり  
傘さしてなかのくれなる太宰の忌  
素直なる心にもどり髪洗ふ  
急がねば午後休診よ凌霄花  
白団扇雨音だけの闇となり  
白雨去りこゑとりもどす雀かな

大 櫛

浜 福 惠

垂直に咲く河骨や薬師池  
とうすみ<sup>ろ</sup>が来て水色の刹那かな  
あめんぼの影水底を独走す  
赤腹に微動だにせぬ業のあり  
かくれ耶穌のむかしありけり合歡の花  
蛇濡れて過るや女関所址  
泰然と夏祓ひけり大櫛

桐の花

山田 暢子

散骨の約束桐の花ひらく  
水筒に泉のこゑの満つるまで  
コーヒーを淹れ郭公を待ちわびる  
夏至の日や原稿用紙五枚ほど  
一本の楠の拒みぬ大西日  
著莪の花雨足といふ速きもの  
清拭の夫に涼しきのどぼとけ

七夕竹

門 伝 史 会

雲の峰日蓮聖人御幼像  
山梔子の花咲く寺の縁起板  
夏休みえんぴつで書く写経会  
例幣使街道途切れ猛暑かな  
どの部屋も皆川へ向く冷奴  
七十路の自問自答や振り花  
担がれて七夕竹となりにけり

「老樹」以後(七)

野 沢 しの 武

故友より郷土の書冊花もう直ぐ  
桜は蕾妻の回忌も無事に済み  
妻逝きてより有り付けぬ木の芽和  
暮れ方の植田に農夫屈みある  
菓子皿を葉のはみ出せる柏餅  
予備校いま自習時間や四十雀  
新樹光制服すでに汚れ見ゆ

鎌倉初秋

塩田博久

朝暑しおのれなだめてバスを待つ  
足の向くままに北鎌倉の秋  
円覺寺山門上の鰯雲  
柏楨に小鳥さざめく秋の朝  
団栗や木隠れに栗鼠登り降り  
塔頭に小さき門あり水引草  
白百合の揺れさざなみの妙香池  
新涼や箒目美しき東慶寺  
客待ちて日焼けの車夫の男ぶり  
店先に主待つ犬や片かげり

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

太陽を煽りあげゆく黒揚羽  
ねぢばなの素直に振れをりにけり  
鋏研ぎ上げ炎天に並べ置く  
闇繋ぐ仕掛花火の走りだす  
寝返りを戻してみても酷暑かな

根岸 善行

どこ迄がいつ迄病後梅雨のなか  
キャンプの夜甕に隠れし星を汲む  
サイダーのコップの中の水平線  
鶯や左の耳で法話聞き  
りハビリで洗ふ茄子を泣かせけり

小林 和子

草茂り村の久那斗の厄人形  
子規古道巡る先々鬼蜻蛉  
蝸や日暮れいざなふ子規の句碑

森屋 慶基

子規を追ひ追ひ掛けらるる夕立かな  
白雨打つ輝子和賀流子規の句碑

井口ふみ緒

どこまでも青き空あり合歓の花  
一つ押すインターフォンや夏の月  
特急の踏切に待つ夕立かな  
姉訪ふや芝生に混じるねぢり花  
ねむの咲く勉強部屋の明るさに

曽根 治子

梅雨深し濡れて艶ある師弟句碑  
身体の真ん中流る汗の玉  
カンナ炎ゆ倚りかかるなどのり子の詩  
もてなしの麦茶画廊にスケッチ展  
梅雨明けや一枚の海日の昇る

◇特別作品◇(抄)

## 海の百万石

祖山 正子

秋めきて潮匂ふなり台場跡

初秋や錆に貝付く大錨

秋茜句碑亀\*巢(銭屋五兵衛の俳号)に来ていろ深めたり

文月や銭屋に遺句の嵩を見て

ひぐらしや商訓にある三ヶ条

銅像の遠目差や秋の潮

新涼の潮風韻く旅半ば

電気灯生みし祖父なり虫しぐれ

船舶の二百の昔鰯雲

色なき風渡りて海の百万石



# 風土独語／神蔵器



太陽を煽りあげゆく黒揚羽

根岸 善行

夏の日は朝日、夕日、そして没日をおのれの威を克明に示して万象に位する。しかして、夏の太陽は一年中でいちばん長い日であり、三伏といわれる季節は、つらなみ山々もどっしりとして、人影も少なくなり、眼にうつる風景は一応夏のままであっても、次第に秋来るの感を深くする。

掲出句は初夏、梅雨明けは間近いが、逡巡する雲の群れがいくつただよっている。しばらくすると雲はゆつくりと動いていく。どうやら目の前に飛んでいた黒揚羽が見えない。これはたしかに黒揚羽が風を吹き起し、太陽も雲も吹き煽ったにちがいない。一点の雲もない輝かしい夏空を讚美している。

どこ迄がいつ迄病後梅雨のなか 小林 和子

これは実感ではなからうか。第三者からは「とてもお元氣そうで、よかったですねえ」と言われると、「ハイ、どうも…」と答えるが、自分ではそんな実感は全くない。「若い時とはちがうのだから…」と自分で自分を納得させようとするのだが、依然としてさっぱりしない。

実は私も今年一月のはじめから激痛におそわれ、約二ヶ月半苦しんだ。今は鎮痛剤は一切服用せず、三食のみ薬であるが、なか

なか元のようなわけにはゆかず、「風土」五十五周年も近づいているのでじりじりしたおもいである。

これは、本文には関係のないことだが、たまたま臥しながら手にした増原良彦の「日本の名句・名言」があり、その本によると「不思議」と言った語は仏教語で、仏の悟りの境地だそうだ。ところで自然科学の立場は、いずれ科学が進歩すれば現在説明できないものも、説明できるようになる。それに対して宗教の立場は、この世のあらゆる事象が「不思議」だとする。花が開く時、蝶が来る。蝶が来る時、花が開く。そこに大自然の靈妙不可思議な神秘がある。

詩人の北原白秋は

薔薇ノ木ニ

薔薇ノ花咲ク

ナニゴトノ不思議ナケレド

梅雨深し投薬隠す生身魂 森屋 慶基

この句を読んで私は涙が出て仕方がなかった。

生身魂は勿論、作者慶基君のお母さんであるが、私としてはお父さんのけいじさんの時代に、何回かお邪魔して、ご家族同様に親しくお世話になった。土地の人達を夜遅くまで句会をやったり、名所、旧蹟を尋ねたり、特に「あがつたんせー」かまくらの楽しい思い出は忘れられない。

お母さんには本当にお世話になりました。けいじさんがご存命であれば「思いきってわがまをしなさい」と言われることでありましょう。(以下略)

# 風土集



## 神蔵器選

全身を細うして吹く鉦の笛 高槻

浅田 光代

鉦会所手ぬぐひ干してシヤツ干して

右近の碑訪へば南瓜の花ざかり

夏草や木棺にある二支十字

雲の峰 高压線に乗り育つ 上尾

根岸 善行

駒下駄の音が縫ひゆく鬼灯市

打水の小石にしじみてふ止まる

ふるさとの駅は小さし雲の峰

雑踏を抜けて 鬼灯市 帰り

五千尺キャンプファイヤー 研して みどり

高瀬志す江

天の川 金紙 銀紙のうら表

ひぐらしや雲中 菩薩 耳傾ぐ

地震癒えて越の棚田の月涼し

古りし町夜店の 一灯ソーダ水

梅雨深し 投葉 隠す 生身 魂 横手

森屋 慶基

小雨なか心折れそな 田草 取り

小庇に追ひ詰めらるる 夕立 かな

螻蛄鳴くや 発祥物議に 納豆 碑

凌霄花 我慢我慢に 母を 看る

百日の 今が 盛りと 百日 紅 さいたま

金井 裕子

蓮の花地より 五尺の 宙に 浮く

待ち合はず 大緑蔭の カフェテラス

山百合のかをりて 四方 八方に

志功の 彫る 天女 さながら 百日 紅

空の あを 真上に 抜けて さる すべり 津山

生田 作

をととひに きの ふまぎれて 合歡の 花

青柿の 続けて 落ちて 蝶の 翔つ

日盛り へ身をはす かひに出で ゆけり

再びの かなぶん 叩く 夜の 玻璃